

ドイツ啓蒙主義歴史学研究

A Study in the Historiography of German Enlightenment

埼玉大学教授 教養学部 岡崎 勝世

Prof. OKAZAKI Katsuyo

Faculty of Liberal Arts, Saitama University

[本年度の研究テーマについて]

ドイツ啓蒙主義歴史学とは、18世紀後半にゲッティンゲン大学を拠点として形成された歴史学であり、その頂点に位置するのがA.L.(von)シュレーツァー(1735-1809)であった。このドイツ啓蒙主義歴史学の研究にあたり、その画期的な世界史記述を支えたものとして三本の柱があると考え、ここ3年間、それら各々の柱について検証を行ってきた。三本柱とは、一は「世界」の観念(宇宙観・地球観)、他は、人間観および時間の観念である。本年度はこのうちの「人間観」に焦点を当て、その具体的内容および歴史的位置を明らかにすることをテーマとした。ヨーロッパでは18世紀後半が人種論の形成期に当たることから、このテーマは、人間観一般との関係だけでなく、同時にまたヨーロッパにおける人種論の形成との関係において、ドイツ啓蒙主義歴史学の位置を考察するという内容も持つことになった。

[シュレーツァーの人間観と世界史記述]

シュレーツァーは、『世界史』(1785)¹⁾において、彼の世界史記述の基礎となる人間について、次のように規定した。

人間は生ずるものではなくて、成るものであり、人間の**人間化**の原因は彼の外部に存する。本性からいえば人間は無であり、諸関係を通じて、彼はすべてのものに成ることができるのである。この**無規定性**は、人間の本性の第二の要素となっている。無数の能力が人間に宿っているが、それを何らかの**機会**が単なる可能性から活動へと誘うことがないならば、能力は永遠に眠り続けるのである。荒野にあって羊の間で育てば、彼は羊となって羊の草を食べ、メエとなくであろし、その創造者の似姿になる環境、すなわちその理性を成長させる環境にあれば、それまで獣に近かった状態を脱し、上昇して高貴なものとなるか、あるいは下降してもっとひどくなるかの**いずれか**であろう(59頁。以下では「引用文1」)。

シュレーツァーはこのようにして人間にルソーのいわゆる「完成能力」とともに「墮落能力」をも認める。その結果現在の世界の人類には「未開人、野蛮人、文明人」(56)の三種が存在するに至っているとし、この現存の人類については、次のようにも述べている。

セネガルのニグロもアルタイのカルムイク人もアメリカのイロコイ人もジャワのカケラーテ人も、ドイツ人、フランス人、ブリタニア人と同一の祖先を有している。全てはアダム家に由来するのである（35頁。以下では「引用文2」）。

シュレーツァーが伝統的・キリスト教的世界史（「普遍史」）を否定して文明史を内容とする世界史を主張した根底には、この二つの文章に代表される人間観があったと言える。

[シュレーツァーの人間観の背景]

シュレーツァーの人間観に一つの出発点を与えたのは、リンネであった。リンネは『自然の体系』第十版（1758）²⁾において人間に *Homo sapiens* の学名を与え、これを六つの亜種に区分した。野生人、アメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人、そして奇形人である。上の「引用文1」で言及されている羊の間で育った人間は、この「野生人」の実例の一つとしてリンネが記載している「ヒベルニアのヒツジ少年」なのである。

他方、このリンネの規定は、以後ヨーロッパで展開されていく人種論の出発点となった。彼はアメリカ人、ヨーロッパ人、アジア人、アフリカ人について以下のように記述した。

- アメリカ人 α. 赤色、胆汁質 (*cholericus* 怒りっぽい) で、筋肉は真っ直ぐ。
(*Americanus*) 髪；黒く、真っ直ぐで、太い。小鼻；広がっている。容貌；そばかすだらけ。顎；まったく髭なし。
忍耐強く、快活、自由。
自身を巧みな赤い腺で装う。
慣習によって支配される。
- ヨーロッパ人 β. 白色、多血質 (*sanguineus* 楽観的) で、肉付きがよい。
(*Europaeus*) 髪；金髪で長い。眼；青。
軽快で、才知があり、創造的。
ぴったりとした服装で装う。
典礼によって支配される。
- アジア人 γ. うす黄色、黒胆汁質 (*melancholicus* 陰鬱) で、しゃちこぼっている。
(*Asiaticus*) 髪；黒毛。眼；黒。
厳格、高慢で、貪欲。
緩やかな服装で装う。
意見によって支配される。
- アフリカ人 δ. 黒色、粘液質 (*phlegmaticus* 遅鈍) で、筋肉はしまりが無い。
(*Afer*) 髪；黒く、よじれている。皮膚；絹のように滑らか。鼻；低い。
両唇；膨れている。女性には「エプロン」があり、乳房からは豊富な乳が出る。

狡猾、鈍く、無頓着。
身体に油を塗って装う。
移り気によって支配される。

オランダ人の医学者カンペルが『人種間の自然的な差異について』（1770）³⁾において目指したのは、リンネのこの規定から文化的な外装を引きはがし、人種を「身体的特徴だけで区別」（14 頁）することであった。彼は「顔面角（額の突出部から上顎前部を結ぶ顔面線と水平線の作る角度）」を考案し、それによると、サル、オランウータン、黒人、カルムイク人、ヨーロッパ人、さらにギリシア・ローマの古代芸術の頭部にいたる漸進的変化が見られるとした。彼はこれにより、「数値化」による「科学的」人種論を出発させたと言えよう。また彼自らの筆になる比較図は、オランウータンに最も近い黒人の頭骨、理想的な美を表現する古代彫刻の頭骨に最も近いヨーロッパ人という、白人優越主義を表現するアイコンとなった。

ドイツではその後、「人種」概念の明確化と自然史記述を要求するカントの議論⁴⁾、カントを批判しながら人類多元説を主張したフォルスター⁵⁾、カンペルの路線を継承した解剖学者ゼンマリンク⁶⁾の研究があらわれる。特にゼンマリンクは、『黒人とヨーロッパ人の身体的差異について』（1785）で頭部から足までの全身にわたる詳細な解剖学的比較を行い、黒人はあくまで白人と同じ祖先から生まれた人間であるとしながらも、「黒人はヨーロッパ人よりもサルに近い」（77 頁）と結論づけている。

こうした流れを受けて議論に一つの決着をつけたのが、自然人類学の祖の一人でもあるブルーメンバッハ⁷⁾であった。彼は、『人間の自然的変異について』の諸版で、リンネ以後の議論を整理した。リンネの「野生人」と「奇形人」が亜種（変異）ではなく偶然のあるいは病的原因による特異例にすぎないこと、リンネがホモ属の第2の種として記述していた「穴居人（*Homo troglodytes*）」が黒人のアルビノ少年に関する情報と古代以来の伝説、さらには類人猿の情報を混同して誤って設定したものであることなどを次々と論証した。こうして彼は人間がホモ・サピエンス一属一種であるということを確認し、そのうえで、さらに、キャプテン・クックの探検航海による新たな知見に基づいて有名な五人種論を提唱するに至る。1781 年の同書第2版でのことであった。ただし、この第2版ではまだ地域的な区別を行っただけであった。しかし1795年の第3版に至って、彼は各々にコーカサス人、モンゴル人、エチオピア人、アメリカ人、マレー人という名称を与えている。

[シュレーツァーの人間観の位置]

シュレーツァーの人間観は、「引用文1」で明らかかなように、ジョン・ロック、ルソーの人間観、さらには人間の自然状態から社会状態への移行とその後の文明の発展という、啓蒙主義時代特有の考え方に一つの基礎を置いている。しかしそれだけではない。彼の『世界史』が出版されたのは、1785 年であった。それは、ブルーメンバッハの『人間の自然的変異について』の第2版と第3版の間の期間に著されている。そして「引用文2」が示しているこ

とは、挙げている典型例はブルーメンバッハとは異なるとしても、地域区分が全く同じなのである。まだ人種名が記されていないのは、ブルーメンバッハ自身が名称を与えていなかったからだと考えられる。ここでは、シュレーツァーの人間観が、ゲッティンゲン大学の同僚でもあったブルーメンバッハの人種論と密接な関係を有していることが示されている。

すなわち、シュレーツァーの人間観は、一方ではロックやルソーの啓蒙主義的人間観だけでなく、他方では、リンネからブルーメンバッハに至るヨーロッパの人種論の展開と結びついて形成されたものなのである。そして彼の文明史的世界史は、このような性格を有する人間観・人種論によって支えられていたと考えることができる。そしてこの意味で、彼の人間観・人種論は、同様に彼の『世界史』も、啓蒙主義時代という特定の時代的・思想的状況を基礎とし、それに対応した内容と歴史的位置を有していたのである。

シュレーツァーの『世界史』では、もう一点指摘すべきこととして、「引用文2」が示しているようにまだアダムが生きている。この点については、ブルーメンバッハも同様であった。しかし、19世紀後半に至ると、ヨーロッパでは世界史記述からアダムが消えていく。この「世界史記述におけるアダムの死」をもたらしたのは、進化論であったと考えられる。だが、世界史におけるアダムの死の問題については、19年度の課題としたい。

[註]

- 1) Schläzer, August Ludwig von, *WeltGeschichte*, Göttingen 1785.
- 2) Linné, Carl von, *Systema Naturae*, Ed. X. 2 voll. Holmiae [Stockholm] , 1758-59.
- 3) Camper, Petrus, *The Works of the Professor Camper on the Connexion between the Science of Anatomy and the Arts of Drawing, Painting, Statuary, etc.*, Trans. T. Cogan, London 1821.
- 4) Kant, Immanuel, *Von den verschiedenen Racen der Menschen*, 1775. 福田喜一郎訳「様々な人種について」(『カント全集 第3巻(前批判期論集 III)』岩波書店 2001年)。
Bestimmung des Begriffs einer Menschenrace, 1785. 望月俊孝訳「人種概念の規定」(『カント全集 14』岩波書店 2000年)。
Über den Gebrauch der teleologischer Principien in der Philosophie, 1788.
望月俊孝訳「哲学における目的論的原理の使用について」(『カント全集 14』岩波書店 2000年)。
- 5) Forster, Georg, *Noch etwas über die Menschenrassen, An Herren D. Biester*, in “*Teutsche Merkur*” (October und November 1786).
- 6) Sömmering, Samuel Thomas, *Ueber die körperliche Verschiedenheit des Negers vom Europäer*, Frankfurt und Mainz, 1785.
- 7) Blumenbach, Johann Friedrich, *On the Natural Variety of Mankind*, Transl. and ed. by Thomas Bendyshe, New York 1969.